

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 阿部俊大

本論文は、中世イベリア半島北東部を支配していたアラゴン連合王国の中核であるカタルーニャ、つまり、当時のバルセロナ伯領に焦点を当て、イスラム勢力と対峙するなかでどのように征服と植民が進められ、新しい支配地となった地域を伯がどのように統治していたかを明らかにしようとしたものである。第一章では、イスラム支配地域への征服活動が本格化する12世紀までの歴史的背景を検討し、第二章では、12世紀初頭、つまり最初期に征服された大都市タラゴーナで、バルセロナ伯がどのような統治を行い、タラゴーナ大司教とどのような関係を有していたかを明らかにしている。第三章では、12世紀半ばに征服されたカタルーニャ南部の都市トゥルトーザで、バルセロナ伯がこの都市の大領主であるテンプル騎士団、さらには、都市民とどのような関係を有し、どのような統治政策を有していたかを明らかにしている。さらに第四章で、辺境地帯の入植者たちに焦点を当て、彼らの社会的・経済的状況、領主との関係を検討し、最後の第五章で、キリスト教徒支配地に住むイスラム教徒とユダヤ教徒の状況を分析している。

本論文の最大の長所は、膨大な量のラテン語史料を検討して、タラゴーナとトゥルトーザにおけるバルセロナ伯の支配と教会領主との関係、入植の実態、イスラム教徒住民の状況を明らかにしている点である。史料の検討から導き出された結論は、これまでの研究を修正する点を数多く含んでおり、中世スペイン史研究に大きく貢献することになると思われる。審査委員会においては、わかりにくい言葉や誤解されやすい言葉を別の言葉に置き換えるべきこと、史料の再検討を要する箇所があることが指摘されたが、先行研究を周到に検討し、種々のラテン語一次史料に基づいてなされた議論はきわめて水準の高いものであり、博士論文として十分満足できるものである。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。